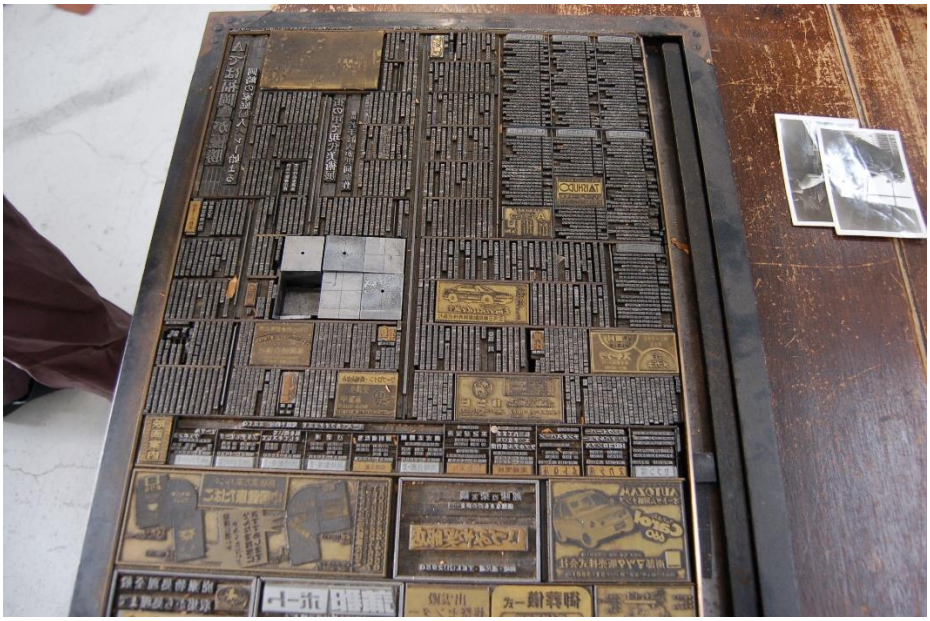
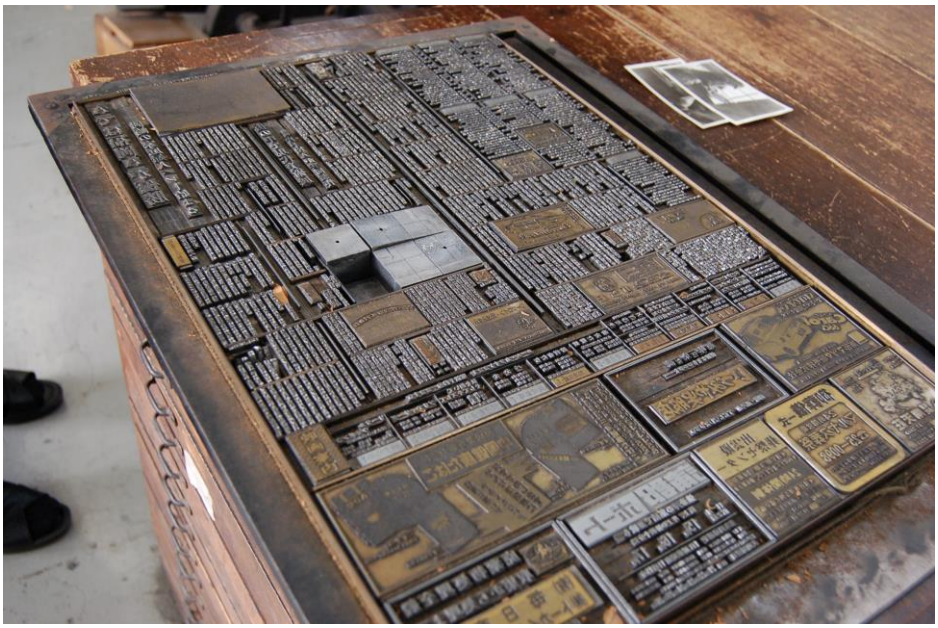
活版（かっぱん）印刷とは

活版【活字（かつじ）を組み合わせて作った版】で印刷することを活版印刷といいます。版画で例えると、彫刻刀でほり終えた板、それが活版（かっぱん）です。
活版印刷をする際には、まず印刷しようとする原稿と、印刷に必要な活字を用意します。その後、適切な活字（かつじ）を選択し、原稿に従って並べます。この作業を植字（しょくじ）と呼びます。
記事ごとに並べていき、数行ごとに移しながら版全体を作り上げていきます。なお、文字ごとに大きさの違うたくさんの活字から適切なものを選択し、印刷寸法に応じて適切に配置するには、高度な訓練が必要となります。ベテランの人になると、新聞一面の活字を用意するのに４５分程度で組み上げられるそうです。
版全体が組み上がったら、バラバラにならないよう糸で全体を縛ります（結束）。その後誤植（ごしょく）がないか確認するため試し刷りを行い（校正刷り・ゲラ刷り）、校正の結果、間違いがなければ印刷機に取り付けて印刷します。

東海愛知新聞では、平成３年まで活版印刷で新聞を作っていました。





東海愛知新聞が平成３年に最後に活版印刷に使った活版の様子。今も記念にそのままにしてあるそうです。この一面の準備が４５分程度です。

誤植（ごしょく）とは、活字に間違えがあることです。見つけたときはこのようにピンセットを使って入れ替えます。

活字が並んでいます。よく使う文字から並んでいます。そのあとに、てへん、さんずい、しんにょう、いとへん、ごんべんなど漢字の部首ごとに並んでいます。

このように活字を選んで箱に入れていきます。それぞれの記事ごとに集めて文章にしていきます。

連絡管とは

東海愛知新聞本社に残された、昔の新聞づくりに使われていた管です。その名の通り、２階の編集部と１階の印刷部をつないでいました。

２階の編集部で作られた原稿が、この連絡管の中を通してすぐに印刷部に送られます。印刷部では、送られてきた原稿をすぐに活字を集めて版を作り、下書きを印刷して、２階の編集部に戻します。当時は滑車がついていて１階から２階にも送れたそうです。

新聞は限られた時間の中で作らなければいけません。連絡管とは、昔の新聞社の人が少しでも作業を早くするために考えた知恵の結晶なのです。

２階の編集部に残された連絡管

１階の印刷部に残された連絡管。昔は滑車がついていて、刷り上げた記事を２階に送ることができました。